

第4章 草津市の「住みやすさ」を感じる要素

1 地域愛着を形成するには

本調査研究において、市民が愛着を感じる要素を探ってきたが、居住地、居住年数、世帯構成別に特徴的な結果を見出すことはできなかった。しかしながら、市民生活に大きく影響しないと思われる「琵琶湖」の存在が、居住年数や居住地に関係することなく無意識のうちに市民感情の中に影響されているようであった。2014年に㈱リクルート住まいカンパニーが実施した「滋賀県の人々の「地域の自慢できるもの・こと」」の調査¹では「琵琶湖」が73.2%と、最も多い回答であったことから、「琵琶湖」の存在は、県民全体に深く浸透しているものと考えられる。また、滋賀県は「湖国」という呼称も公に用いられ、「湖北・湖南・湖東・湖西」という琵琶湖を中心とした地域分類があり、柳橋(2013)によると「生活者・居住者の視点からは、愛着も含め、滋賀を包括する存在が琵琶湖なのである。」と述べている。

これまで、「草津らしさ」、「草津ならではの」という、限定的な地域資源を探ってきたが、今後は、市民感情に影響があると考えられる「琵琶湖」を活用したイベントやネーミング、ロゴマークにより、更に愛着を感じられる「草津らしさ」「草津ならではの」の資源が創出されるのではないかと考えられる。

また、しっかりとしたコミュニティが形成されていることも、地域への愛着を形成するうえで大きく影響していると考えられる。鈴木・藤井(2008)による「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」において、自動車を利用する割合が高い人ほど地域風土との接触が少なく、徒歩・自転車で移動する割合が高い人ほど地域風土と接触する程度が多いことを示唆する結果と、地域風土との接触の程度が、地域愛着(選好)²に正の影響を及ぼすことが報告されている。また、地域愛着が高い人ほど、町内会活動やまちづくり活動などの地域への活動に熱心である傾向が示されたことを報告している。

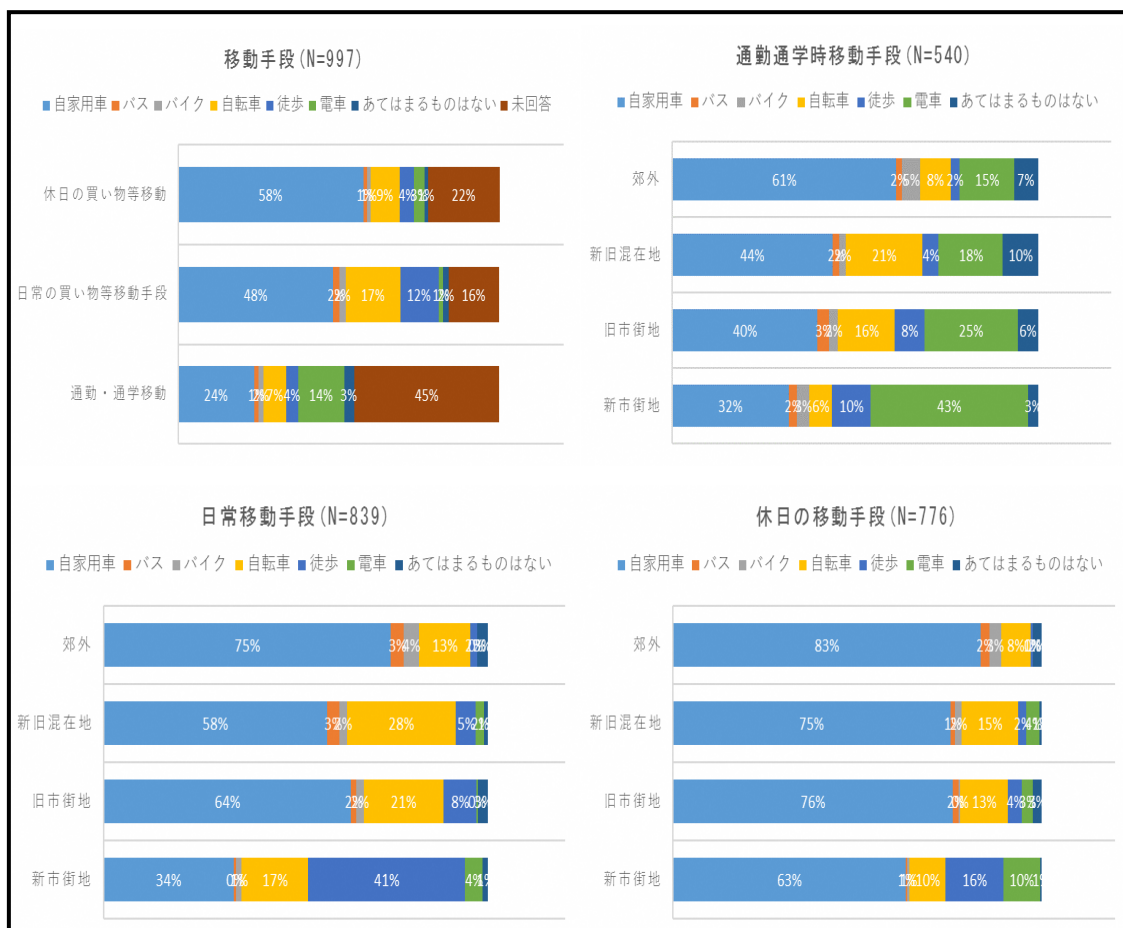
草津市では、日常的に車を利用されている市民が多く、通勤通学で43%、買い物などでは57%を超える市民が車を利用している状況(図3-1)であり、特に郊外における車の利用率は高い。また人口増加に伴い、市内の保有台数も増加(図3-2)している。徒歩・自転車による移動を中心とした社会を形成することが地域愛着に繋がるとするのであれば、市全

¹ https://suumo.jp/article/oyakudachi/oyaku/chintai/fr_data/fr-rank25_07/(2018. 2. 23 閲覧)

² 個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味する尺度。

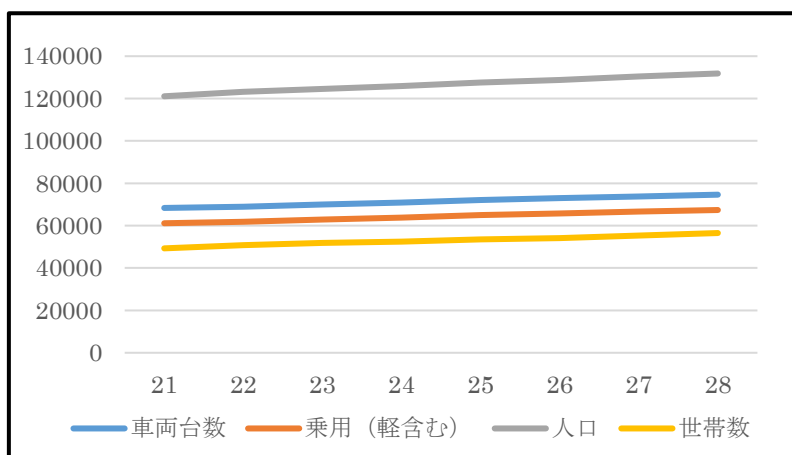
域をカバーする公共交通ネットワークの形成と利用者を確保する手立てが必要である。

図 3-1 移動手段(アンケート調査結果)



出所：草津未来研究所作成

図 3-2 車両登録台数の推移と人口、世帯数の推移



出所：滋賀県統計調査から作成

2 草津市の魅力

草津市は、古くから交通の要衝として栄え、現在も名神高速道路、新名神高速道路、京滋バイパスなどの主要幹線道路が交差するまちであり、鉄道においても JR 琵琶湖線や JR 草津線、また、新快速の停車駅でもある草津駅、南草津駅を有し、京阪神地区へのアクセスも良いまちである。このことが多くのランキング調査において草津市が上位の位置に評価される主な理由であり、草津市の「住みやすさ」を考える上で「利便性」が最も優位であることに間違いはない。しかしながら、この他に「安心安全・つながり・ゆとり」を感じられる要素が加われば、更に草津市の魅力は高まるはずである。

「安心安全」に対する意識としては、本調査研究において、災害時の助け合いは、多くの市民ができると回答しているものの、連絡方法などを相談していない市民の多いことが不安要素として残る。しかし一方で、他地域から転入した人からはスクールガードが高く評価されている。また、「つながり」に対する意識としては、国勢調査による人口を見ると、昭和 40 年では 38,328 人であった人口が、平成 27 年では 137,247 人と、半世紀で約 3.6 倍にも増加していることから、入り人の多いまちであり、既存コミュニティでも受入れ易い環境にあると考えられ、「人に優しい」まちとして今日の草津市が形成されてきたと推測できる。また「ゆとり」に対する意識としては、人それぞれの価値観により異なるが、ゆとりを意識できる文化スポーツ施設は十分に存在し、恵まれた環境にあると考えられる。

その他にも草津市には、国の史跡として指定されている「草津宿本陣」や「芦浦観音寺」などの歴史的施設、天井川であった草津川を改修した草津川跡地公園や、「急がば廻れ」の語源にもなった「矢橋の渡し」、日本六玉川の一つである「野路の玉川(荻の玉川)」など自然と文化歴史が融合した場所や、草津メロンを始めとする農産物など、多くの地域資源がある。更に、癒しの場となる「琵琶湖」に面していることは、草津市の大きな魅力となり得るものである。

第 5 次草津市総合計画では、「将来に描くまちの姿」である「出会いが織りなすふるさと“元気”と“うるおい”のあるまち草津」を実現するため、第 3 期基本計画において『「健康都市」づくりの推進」「子育て・教育の充実」「“まちなか”を活かした魅力向上」「コミュニティ活動の推進」の、4 つのリーディング・プロジェクトを掲げ取り組みを進めている。今回の意識調査を通じて、「子育てや教育が充実した環境にある」ことや、「しっかりしたコミュニティ活動がある」などの意見から、着実に成果が出てきていると推測す

るところであり、第2期基本計画から取り組んできた「草津川跡地の空間整備」は、市民の意識の中にある「琵琶湖」へ通じる緑地空間として市域を東西に繋ぐかけがえのない場所となっている。さらに昨年整備された「de 愛ひろば」は、既に市民から「愛着のある場所」として挙げられるようになり、「健幸都市」づくりに関するイベントにも活用され、それぞれのリーディング・プロジェクトが交わりながら、一体となって推進されていることがうかがえる。しかしながら、市民が「住みやすい」「住んでよかった」「住み続けたい」と感じるまちを目指すのであれば、シビック・プライド³の醸成が必要不可欠である。2016(平成28)年度草津市のまちづくりについての市民意識調査結果報告書における「まちの住み心地」の設問においては、「総合的に住みやすいまちである」の項目で「そう思う」「ややそう思う」の回答が70%を超える評価であったが、シビック・プライドに影響すると思われる、「まちに誇れるもの(ブランド)がある」「文化・芸術の振興が図れているまちである」「市民主役のまちづくりが進んでいる」の項目では20%前後と低い評価であった。「市民であることに誇りや愛着を持っている」の設問においても「そう思う」「ややそう思う」の割合が50%に満たない結果であったことから、今後、これらの設問に対して高い評価が得られるまちづくりを重点的に進めることができれば、さらに魅力あるまちとして評価を得ることができると考える。

³ まちに対する愛着や草津市民であることの自負と誇り。